

日田林工 窮地何の エース緊急降板、代役好投

▽3回戦

三 隈	1 0 0	0 0 0	1 0 0	2
日田林工	0 1 0	4 0 0	0 0 ×	5

中盤の好機で畳み掛けた日田林工が粘る三隈を振り切った。

日田林工は同点で迎えた四回、江藤、河野の安打などで2死満塁とし、松川の適時打で2点を勝ち越した。さらに佐藤の適時二塁打でリードを広げた。左腕長尾が粘投で相手反撃を抑えた。

三隈は七回、梶原康が足を使って好機を広げ、松岡の適時打で1点を返したが、及ばなかった。



【日田林工エース三隈】初回から緊急登板し、力投する日田林工の長尾＝別大興産スタジアム

初回途中から救援した日田林工の長尾祐太（2年）が8回3分の2を被安打4の2失点にまとめ、2年連続の8強入りに貢献した。「仕事は果たせた」と納得の表情で準々決勝進出を喜んだ。

初回にアクシデントが襲った。試合直前に肩に違和感を感じていたエース有永夢叶（3年）が打者2人に投げ終えた時点で降板。急きょ長尾に白羽の矢が立った。

ブルペンにいたが、まだ体操中だった。肩も気持ちもつくれていない状況で、1死二塁の場面での緊急登板。いきなり左中間を破られて1点を失った。だが「これで目が覚めた」。後続を2連続空振り三振で断ち、リズムをつかんだ。

頼りの打線も援護した。二回に岩下凌大（3年）が左翼席に同点弾を放った。「あの一発で落ち着いた」。射場尚隆監督の言葉通り、チームは活気づき、四回に4点を勝ち越した。

長尾も応え、粘投で同地区ライバルの反撃を抑えた。次は明豊戦。エースの復調が間に合うか分からない中、頼れる左腕は「自分が抑える」と誓った。

先制の三隈一步及ばず

先手を奪った三隈だったが、同地区決戦に敗れ、苦杯をなめた。黒川憲人監督は「接戦に持っていきなかったが…。四回の失点が痛かった」と肩を落とした。

初回、1死二塁で「投手を楽にさせたかった」という梶原康太主将（3年）の左中間を破る二塁打で先制。四回に4点を失ったが、その後は本河征樹（同）が好投。七回に1点を返し、最終回も粘ったが届かなかった。

梶原主将は「できなかったことを次に活かしてほしい」と、6人の後輩に思いを託した。

※この記事は、7月19日大分合同新聞朝刊19ページに掲載されています。